２　作りたい旋律について、自分の考えをもつ。(図20)
○前の時間に自分で作った旋律を聴いてみましょう。

「和音」について

知覚
ここの４度はドでなくてファにしてみようかな。

知覚
何か、変な感じ…。

図20　自力解決場面

３ グループごとに、旋律づくりをする(図21)。
○各グループで協力して、それぞれの部分の旋律を作ってみましょう。
C 作ってみたけれど、伴奏に合わせたら実際はどんな演奏になるんだろう。
タブレット PC を使いたいな…。

「旋律」について

感受
歌いやすいかな。みんなで歌ってみようよ。(歌ってみて)…ここはいいけど、ここが歌いにくいね。

知覚
ミドレ～をドドレ～にしてみようか。

図21 グループごとに、タブレットPC上で旋律づくりをしているところ

図２０のように、まずはワークシート上で考えて、具体的にタブレットＰＣでここを聴きたい、試したいというポイントを明確に持たせて活用させた。旋律を入力し、試聴しながらより歌いやすいまとまりのある旋律へ練り上げていかせた（図２１）。

４ 曲全体のまとまりを考えて旋律を仕上げる。
○各グループが作ったものを全体でつなげて歌ってみましょう。歌いにくいところがないかも確認しよう。
C いいね。もう一回聴きたい。

○曲の山はどこにしますか。山のてっぺんにくる音（言葉）はどれですか。
C３段目かな。音が上がっているから。
C４段目もいい…。
C う～ん。でも、どの歌詞にもどの段の旋律にも思い入れがあるから決められないな…。
○じゃあ、３・４段落を特に気持ちを込めて歌おう。

図22　電子黒板を使って、全体で考えを練り上げているところ

各グループで創作した旋律を電子黒板上でつなげて提示し、考えを交流した（図２２）。

５　作り上げた曲を全体で歌う。(図２３)
○最後に、作った学級歌をみんなで歌ってみましょう。
C 自分たちで曲を作るのが楽しかった。
C みんなで意見を出し合えた。

生き生きと表現
自分たちで作った学級歌。嬉しい。歌詞を大事に歌いたい！

図23　出来上がった学級歌を全員で歌っている様子

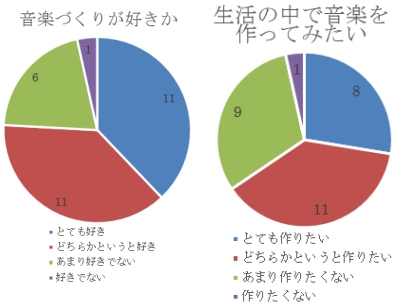


図24　5・6年生(29名)創作活動への意識調査(4段階評価)

図２４は学習後に創作活動への意識調査を表している。ＩＣＴ機器を効果的に活用することで、旋律や強弱、曲の山などの共通事項内容もしっかりとおさえながらも、創作活動への関心意欲を高めることができた。また、学習でつけた力を生活の中で活かしたいという思いも高めることができた。さらには、単元最初に『自分たちの学級歌を作る』という目的を伝えたこと

で、自分たちの生活に音楽科学習が役立っていくという有用感を持ちながら学習を進めることができたことが良かった。個人用ワークシートなど従来のやり方も大切にしながら、まずは個人の考えを明確に持たせた。その学習の流れの中にタブレット PC を思考するためのツールとして取り入れ、試聴したり考えを練り直したりすることができた。最後に、再度ワークシートに練り上げた旋律を書き留めることで、自分の考えを明確に持つことに加え、自分たちの思考の変化や伸びがわかるように工夫できた。タブレット PC もグループで１台ずつとしたことで、グループ内で個人の考えを全体の中で生かしながら協力できたという思いも高まり、協働学習の有用感も味わうことができていた（図２５）。出来上がった学級歌は、さっそく学級の折々に歌っている。さらには、３学期の学習発表会や卒業式でも披露する。

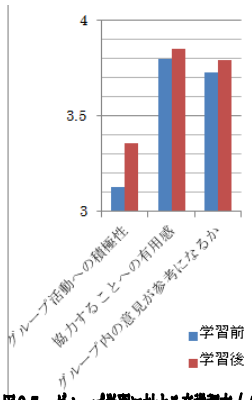


図25 グループ学習に対する意識調査（4段階評価）

（２）鑑賞領域について

①１年「おどるこねこ」

この学習では、音楽を想像豊かに聴いたり、思いをもって表情豊かに表現したりすることができるようになることをねらいとした。拍の流れ、リズム、旋律、音色等、音楽を表現する上で大切な感覚や技能などを中心に学習してきたことを活かし、表現をより一層豊かなものにするための感性を育てることに重点を置いて学習を展開している。「おどるこねこ」は３拍子のワルツであり、自然に体を揺らしたり鳴きまねをしたりすることができ、身体表現を好む低学年に適した教材といえる。また、身近な動物である猫を題材として描写的に曲ができているので、子どもたちの興味を引き出しながら場面を想像したり変化を感じ取ったりしやすい教材といえる。さらには、繰り返し出てくる猫の鳴き声や猫の動作を表した音色を手掛かりにして、場面を想像したり楽曲の構成（あ－い－あ’－Ｃｏｄａ）や気分の違いなどを感じ取ったりしやすい。音楽に合わせて歩いたり、手拍子を打ったりするなど、身体表現を大切にしながら取り組んだ。

学習活動（○発問や指示　C 児童の反応　・支援）
１　今月の歌を歌う。 ２　楽曲に出会い、本時の学習のめあてを確認する。 ○曲を聴いてみましょう。どんな動物が出てくるかな。（coda の前まで） C ねこの鳴き声がしたよ。 『おどるこねこ』のようすをおもいうかべてきこう。

３　こねこの様子を想像しながら聴く。
①楽曲全体を試聴し構成をつかむ。
○こねこのおどりが変わったところはどこでしょう。
○お話の場面はいくつ出てきましたか。
C「あ」「い」「あ」の３つが出てきたよ。

音楽の仕組み「反復」について

②「あ」を聴き、こねこの様子を思い浮かべる。
○猫の鳴き声が聴こえたら猫のポーズをしましょう。
C 猫の声がたくさん聴こえるね。

○猫たちは、どんなふうに踊っているのでしょう。
C ゆらゆらゆれているみたい。気持ちよさそうだな。

ムービーメーカーで曲に合わせて場面を表すスライドが変わっていく作りになっている。

図26　自作コンテンツを使って鑑賞を行っているところ

楽曲の気分が変わったときに挙手させることで、構成をつかむことに視点を持たせる。その後、自作コンテンツ（図２６）を視聴して楽曲の構成を捉えさせ、その根拠となるもの（共通事項内容）が何かという思考へとつなぐようにした。

③「い」を聴き、「あ」との曲想の違いを感じ取る。
○「あ」と比べて、「い」では、こねこはどんな風におどっているのかな。

○なぜそんな風に思うんだろう。

感受
遊んでいるみたい。

感受
けんかしているのかな。

感受
ぐるぐる回っているみたいにも聴こえるよ。

身体表現しながら曲を聴いているところ

知覚
「あ」よりも「い」の方が速く、細かい感じになっている。

「速度」「リズム」について

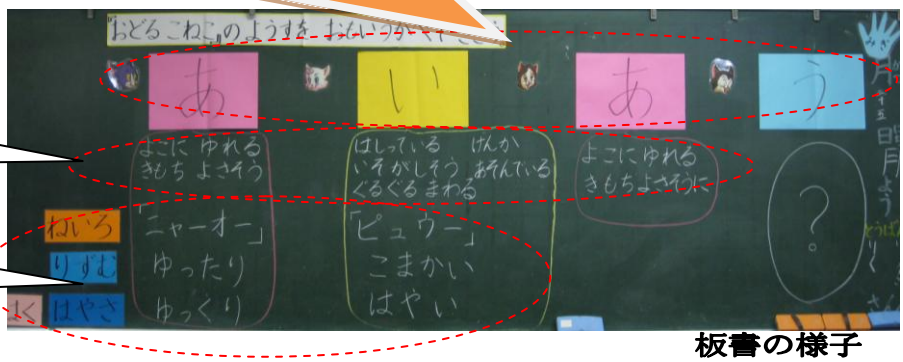
知覚
途中で“ピュゥ”って聞こえたよ！

「音色」について

自作コンテンツと同じものを板書し、楽曲の構成を決定づけた。

感受
曲のイメージを持たせる。

根拠を共通事項からたぐりよせ、知覚させる。



板書の様子

４　身体表現しながら、楽曲全体を聴き味わう（図２７）。
○最後に、みんなでこねこになって楽しく踊りましょう。

生き生きと表現
「あ」は、ゆったりと気持ちよさそうに踊ろう。でも「い」は、足を速く動かしてステップをふむぞ！

図27　学びを活かして、楽曲に合わせて身体表現しているところ

この実践と同様に、６年生の鑑賞教材「木星」でも取組を行っている（図２８）。この自作コンテンツは、曲の構成をつかんだり、曲想の変化に気づいたりすることが容易にできるという利点があった。音楽の特性上、ただ聴いているだけだと聞き流してしまう音を、視覚的に捉えながら聴くことができるのである。漠然と曲を聴くのではなく、曲の場面の変わり目を感じ、その根拠となるものが何なのか、共通事項でいう“リズム”の変化か、“速度”が変わったのか、使われている楽器が変わったからなのか（“音色”）という聴く視点が生まれ、そこから全体の曲想というものを捉え音楽をより深く味わって聴くことができた。

図28　6年生鑑賞「木星」にて同様の自作コンテンツを使用している様子

２　研究仮説２の検証

（１）学級に活かす取組について

①６年生「旋律づくり」の実践より

６年生の旋律づくりでできた学級歌（図２９）は、普段子どもたちが歌い親しんでいる。子どもたちは「この歌を自分たちが卒業した後にも在校生に歌い継いでいってもらいたい。」と話している。よって、３学期に行われる学習発表会や卒業式などで歌い、全校児童に、そして地域に発信していく。歌詞、リズム、旋律とすべてにおいて自分たちの手で作り上げたということが大きな自信につながった。

国語科との関連を図り、俳句で学級や学校の句を詠んだ。たくさんの句の中から、春夏秋冬に整理し、歌詞を選びだした。俳句は字数に制限があるため、より言いたいことを端的にまとめることができる。全体でつなげたときに歌詞に統一感が生まれてよかった。

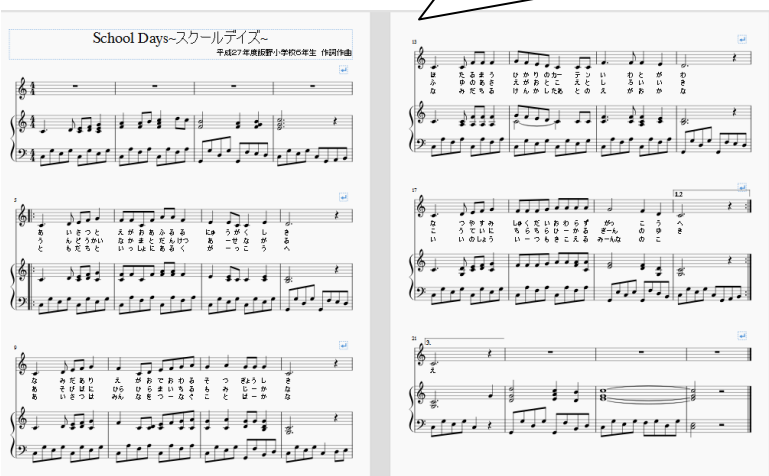


図２９　出来上がった学級歌

②６年生を学校全体の中心的役割に据えた取組

今年担任している６年生は当時３年生の頃も担任させていただいている。その頃からこの子どもたちは音楽に親しみ表現することが大好きだった。最上級生となり、音楽科での様々な感性や力も十分についてきた。このような６年生を、学校全体の音楽活動の中では中心的役割に据えたいと考えた。そこで、まず本校の“校歌”に着目した。校歌は本来斉唱によるものであるが、あえて副次的旋律を作り、そのパートを６年生に歌わせた。聴きなれた校歌でも、自分たちが副次的旋律を務めることで歌に深みが増すことが感じられ、毎回とても誇らしげに生き生きと歌う姿があった。なにより６年生としての責任感が高まった。その他に、“今月の歌”で６年生による合唱を範唱ＣＤとして作成し、各学年に配ったり校内放送で毎朝流したりして、自分たちの生活の中に音楽が生きているという思いをもたせることができた。

（２）学校全体や地域へ発信する取組

①２年生「旋律づくり」の実践より

図３０　学習発表会で『あめ』を披露している様子

前述したように、音楽科で学習したことが、自分たちの生活に活かされている、音楽によって生活がより豊かになっているという体験を多く取り入れることにも努めた。まずは、２年生を対象に行ったリズム遊びでは、創作したリズムを太鼓のリズムモチーフに編成しその演奏を学習発表会で披露した。その作品題は『あめ』。自分たちで作ったリズムを、雨が降ったりやんだりする表現にするために、速さや強弱、反復、そしてリズムを変化させていくなど、さまざまな共通事項に着目し工夫して叩くことができていた。学習発表会では、実際に子どもたちが作成した作品であることがわかるようにプレゼンテーションで示しながら披露した（図３０）。さらには、地域にある老人ホームへ出向き、太鼓の演舞を行い、交流を図った。子どもたちが生き生きと演奏する姿に涙されるお年寄りの方々も多かった（図３１）。

図３１　老人ホームで太鼓の演舞を披露する子どもたちと見守るお年寄りの方々

②音楽クラブの取組より

図３２　音楽クラブ　演奏発表の様子

本校に赴任してから音楽クラブを作った。１人でも多くの子どもたちに授業だけでは味わえない音楽の楽しさを味わってもらいたい、校内や地域の方々にそれを発信してもらいたいという思いだった。今年で５年目。この音楽クラブでは、主に和楽器（主にお琴。今年からは和太鼓も取り入れている）を扱っている。クラブは月１回の活動ではあるが、毎時間外部講師にも来ていた

だき練習に励んでいる。その成果を、ＰＴＡ行事であるホタル観賞会や校内の学習発表会（図３２)、そして益城町の文化祭などでも披露する機会を設けてきた。和楽器の豊かな音色から我が国古来より伝わる音楽の独特の世界観を聴き味わう機会になっている。

③鼓笛隊について

図３３　本校の鼓笛隊

様々な学校行事や教科の中でも、音楽は関連が強い。音楽科でつけた力を要として、様々な教科や行事などに関わっていく取組を行ってきた。まず、本校は、総合的な学習の時間で鼓笛隊の活動を行っている。毎年、本校の運動会で保護者や地域の方々へ向けて披露する（図３３)。鼓笛隊の演奏は、本校の大切な伝統であり、児童はもとより多くの方々に愛されている。この活動の中でも、音楽科の学習を活かしている。鼓笛の見どころに、行進と隊列の動きがある。曲を演奏しながら拍の流れを意識していなければ到底できないことである。拍子感を持たせるために、拍子の１拍目に動きの始まりがくるように（しかも左足から統一）ドリルづくりを工夫した。さらには、めりはりのある演奏を目指して場面ごとに強弱や速度などにも工夫し演奏させた。毎時間の学習の振り返りでは、「もっと拍に足を合わせよう」「演奏が早くならないように。指揮者をしっかり見てね！」など共通事項を意識した呼びかけなども多く聞かれた。総合的な学習の時間を活用した練習では、毎年私はパーカッションを主に担当し指導にあたっている。大太鼓、中太鼓、小太鼓、シンバルから編成され、それぞれ異なる楽器と楽譜を単独で指導するのは非常に困難であった。譜読みが十分でない子どもたちにとって、その練習では教師に頼る部分も多い。そこで、今年はパート毎に私自身が範奏したものをタブレット上に事前に記憶させておき、子どもたちがそれを試聴しながら演奏練習する（図３４）という練習形態にした。この工夫で大幅にその効率が良くなった。児童はまず従来通り、自力で譜読みをして練習をする。その中で「ここのリズムがどうしてもわからない。」「ここの演奏がもっと上手になりたい。」など、自分の課題意識を明確に持たせた後にタブレットを活用させたことで、一人ひとりのニーズに合わせることができ、短時間でより上手に演奏することができた。さらには教師に頼る時間が減った分、私は子どもたちの進捗状況を把握しながら細やかに声かけをすることができるなど、より一人ひとりの子どもたちに深く関わることもできて良かった。

図34 タブレット上で範奏を聴きながら練習する様子

④全校児童合唱について

学習発表会では、オープニングとして毎年全校児童で合唱を行う（図３５)。ここでも、単に

技能面だけの指導になるのではなく、和声の響きに着目した学習を行っている。和声が豊かな響きになるために、主旋律と副旋律を互いに意識させたり、かけ合いの面白さを味わったりして歌わせている。楽曲の拍の流れに合わせて手話などの身体表現もつけるなど､様々な共通事項に着目させる工夫をして構成している。

図３５　全校児童合唱の様子

Ⅵ　研究の成果と課題

１　研究の成果

（１）仮説１について

１～２年生担任の２年間の研究で、図３６からもわかるように、意欲面だけでなく拍子感も高まった。リズムや音符などへの理解もずいぶん深めることができていた。こういった確かな学力を音楽科への意欲を損なわず達成できたことがよかった。知識理解に偏らず、ＩＣＴ機器を効果的に活用できたことで、子どもたちの意欲面を引き出しながらも共通事項に着目して表現することの楽しさを十分に体験することができた結果である。

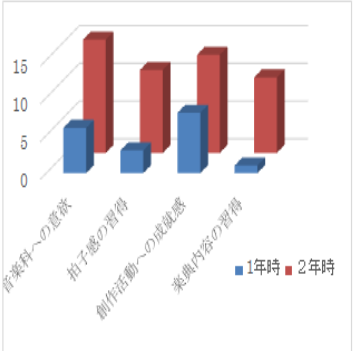


図３６　低学年実践の成果（２年間）

教室では、いつもいきいきと歌を歌っていた子どもたちである。１年生の４月当初、音楽の授業中に歌ったり体を動かしたりするときにはうつむき、かたくなに動こうとしなかった男の子１名、女の子１名がいた。「この２名の子どもの顔が上がるような授業がしたい」と思った。この２名は、２年生になる頃までには全く違う姿を見せてくれるようになった。鑑賞で『おどるこねこ』を学習した時には、「こねこが足をばたつかせて踊っているように踊りたい。」、『シンコペーテッドクロック』の学習では「壊れた時計が途中で“ジリジリ～”と目覚ましの音をたてるのを頑張って表したい。」という思いをもち、そのものになりきって生き生きと踊っていたのもこの男の子であった。また「音楽が楽しい。」「先生のようにピアノが弾けるようになりたい。」と１年生の終わりにピアノを習い始めたのは、もう一人の女の子である。音楽学習の体験を自分たちの生活に活かしていきたいという彼女の姿が嬉しかった。２年生最後に２年間の学校生活を振り返って感想文を書いた。その中にもたくさんの子どもたちが音楽科の学習に触れ書いてくれていた。

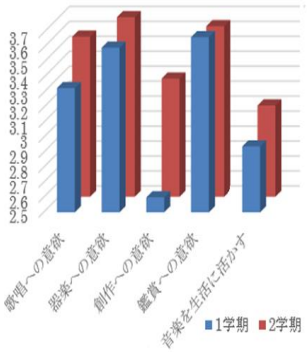


図３７　６年生意識調査（４段階評価）

図３７は、本年度担任している６年生の成果を表している。音楽科の各領域において、子どもたちの意欲に高まりが見られた。特に高学年児童の課題でもある創作活動への意欲に高まりが見られた。学習後には､「音をつなげら

れるように努力した」「歌いやすいように音階の上下が少なくなるようにした」「音を組み合わせて歌をつくるのが楽しい！」「旋律やリズムが歌と合っていたのがすごい！」といった感想がたくさん聞かれた。共通事項内容から音楽のよさや楽しさを感じて、思いをもって生き生きと表現することができていたことがわかった。また、図３８からもわかるように、音楽科の学習において、自分の自由な発想を楽しみながら創作活動ができているという点でも高まりが見られ、生き生きと表現することができていたことがわかった。

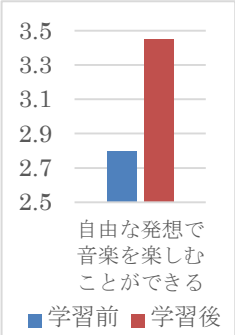


図３８　6年生意識調査（4段階評価）

（２）仮説２について

音楽科の学習や経験と生活をつなげることを意識したことで、“音楽が自分たちの生活に役立っている”、“もっと音楽に親しみたい”、“音楽のよさを伝えたい”など主体的に音楽を愛好する子どもが確実に増えてきた。図３７からもわかるように、“音楽科の学習を自分の生活に生かしている”と答えた子どもが約２倍に増えた。「３年生になったら鼓笛を頑張ろう。」「来年は音楽クラブに入りたい。」「これからももっと太鼓や琴を演奏して、みんなに広めたい。」などという声も他学年のうちからたくさん聞くことができた。１１月の児童集会では“今月の歌”を全校児童で歌った。この１１月の歌も、６年生が６月から帰りの学活等を利用して主旋律パートを練習し、その成果を録音したものを範唱ＣＤにして他学年が活用していた。併せて６年生には９月から副次的旋律パート（自作したもの）も練習させてきた。そしていよいよ１１月の児童集会で、主旋律を歌う下級生に合わせて副次的旋律を６年生が重ねたのだ。４月当初は歌うことに恥ずかしさが芽生えていた子どもたちも多かったが、そこには和声の重なりや響きを感じながら生き生きと歌う６年生の姿があった。集会後には、「今日の集会がすごく楽しかった。」「またみんなで歌声を合わせたい。」などたくさん感想を聞くことができて嬉しかった。３学期は、６年生が５年生をリードするかたちで高学年が副次的旋律パートを練習し、その成果を学習発表会の全校児童合唱で披露する予定である。子どもたちが感じることができた音楽の喜びを、今度は地域へと発信していく機会にしていきたい。

２　研究の課題

音楽科における基礎基本がしっかりと身につき、個人の考えや意見を明確に持たせた上でICT 機器を活用させることが大切だということが分かった。デジタルとアナログをそれぞれの単元の中でどう融合させていくか、今後も研究していく。また、昨年度から太鼓の経験をさせてきているが、より一層他教科等との関連を図ったり、教育活動内に明確に位置づけたりするなど教育諸計画を見直していきたいと思う。さらには、この研究成果をもとに、今回の取組を公開授業や校内研修等なども活用し、学校内外に広げていくことにも努めていきたい。

おわりに

これまでの実践では、子どもたちの出会う音楽を共通事項のどこと重ねて捉えさせるか私自身が明確にもって、子どもたちの指導にあたってきた。より幅広く、そして深く音楽を捉えたり、その楽しさや喜びに気づいたりするための視点をもつことで、より一層、音楽的感性は磨かれるからだ。しかし本来、音楽は出会う人によって感じ方が変わってくるものだ。学校教育における学習で培った感性を土台にし、将来そこから自分の感性だからこその新たな発見や喜びを見出し、我々教師を越えていってほしいと願う。そのために私たちは、子どもたちの遠い未来にまで思いを馳せ、音楽科教育に携わっていかなければいけないと思うし、そのためには先ず私自身が、より音楽的感性を磨いていくことが大切なのだと感じている。

本研究を進めるにあたり、本校職員の諸先生方をはじめ、熊本県教育委員会教育政策課の溝口博史指導主事、熊本県立教育センターの彌永有香指導主事など、多くの先生方にご指導ご助言いただいたことに深く感謝申し上げる。

今年２月には、熊本県立教育センターの研究発表会が行われる。私自身の研究課題でも述べたが、一人でも多くの先生方に、研究の成果からわかる音楽のよさや素晴らしさを発信していければと考えている。

≪参考文献≫

・小学校学習指導要領　音楽科解説編（平成２０年　文部科学省）

≪使用したソフト等≫

・ガレッジバンド（iPad）／Apple 社

・ロイロノート（iPad）／Apple 社～

・音楽帳６（Windows）／KAWAI

・ミューズスコア（Windows）／musescore.org

・ムービーメーカー（Windows）／Microsoft Windows